

4分で4冊!

新刊新書 サミング・アップ



岩波新書
760円＋税

抗生物質と人間 マイクロバイオームの危機

山本太郎 著

最新の科学的知見を基に、耐性菌により「腸内悪環境」さえ出現する、抗生物質の「逆襲」の意味を問う。

日本人の平均寿命はここ1世紀で2倍になった。寿命の延びの大半は1940年以降に起こった。抗生物質の開発と普及がそれに大きく貢献してきた。この万能の薬と目された抗生物質は今や効力を失い、人類はポスト抗生物質時代に突入しつつあるという。増加する生活習慣病、拡大する薬剤耐性菌。その背後には抗生物質の過剰使用がある。100兆個を超える膨大な数の細菌と共存する人類だけに、抗生物質の服用によって攪乱され失われていくヒト常在菌叢（ヒト・マイクロバイオーム）を忘れてはならないと力説する。

日本でもかつては、多くの女性権力者「女帝」が存在していた。古代から近代までの彼女たちの歴史を、東アジアの諸王朝などと比較しながら論じていく。



NHK出版新書
900円＋税

〈女帝〉の日本史

原武史 著

初的女性天皇となった推古天皇、一条天皇の皇后となり摂関政治全盛期をもたらした藤原彰子、室町幕府8代将軍・足利義政の正室である日野富子、豊臣秀吉の側室・淀殿など、彼女たちはどのようにして強大な権力を手に入れたのか。

一方、近代以降は、美智子皇后に代表されるような良妻賢母的で国民に慈愛を注ぐ「母」としての女性像が広く称賛されるようになる。著者は、日本で女性政治家が少ない原因の一端を、こうした「母性」に発見する。



小学館新書
780円＋税

ヒトは「いじめ」をやめられない

中野信子 著

「子どものいじめ撲滅」に向けて大人たちが尽力している一方で、大人社会でも「パワハラ」「セクハラ」などの事件が後を絶たない。脳科学者の著者はいじめ、すなわち「社会的排除は、人間という生物種が生存率を高めるために、進化の過程で身につけた『機能』」であり、「そこには何かしらの必要性や快感がある」と判定する。特に子ども時代は、「いじめると楽しい」という脳内麻薬に対して、共感というブレーキは働かないため、これを止めるには「自分が相手を攻撃すると自分が損する」というシステムが必要と言う。

人間の生物学的な本質を見つめながら、世代を問わないいじめの回避策を脳科学の観点から説く。

「夢」には「リスク」も伴うとして、必要な3K「健康・カネ・カミさん」に加え、治安情勢に関心を説く。生活レベルは「人生観」で決めよとアドバイス。



新潮新書
740円＋税

定年後の楽園の見つけ方 海外移住成功のヒント

太田尚樹 著

「明るい老後」はどこにあるのか。日本のしがらみから離れ、海外で「第二の人生」を謳歌する人々の物語。

たとえばフィリピンのおホー島で17歳の花嫁と結ばれた元銀行マン。マレーシアのコスモポリタンの町ベナンで、NHKの朝ドラ視聴が日課の元大学教授夫妻。いづれ仏カニヌかニースへ移住しようと考えているスペイン南部マルベージャ居住でゴルフさんまの元テレビマン夫婦……。いづれもきつかけは、何も試さないで老後を迎えることへの軽い疑問だった。